

仏教と女性をめぐる現代的課題

——女性仏教徒たちの語りから——

丹羽 宣子

本発表は、女性仏教徒たちの書き記したドキュメントや報告書などを手がかりに、教義上の問題としてだけでは回収し得ない現実の把握を試みるものである。

男性僧侶の配偶者（「寺族」）たちは、教団内での曖昧な位置づけや居心地の悪さ、境遇への不安などを多数記している。出家主義を掲げる教団では、教義上僧侶の結婚や配偶者・家族の存在を認めることができないためである。一方、在家仏教の立場をとる真宗教団では婚姻関係を前提とした坊守規定が定められているが、このことよって性による役割の固定化がなされていると指摘されている。女性僧侶も、その境遇には厳しいものがある。例えば『日蓮宗全女性教師アンケート報告書』（二〇〇四）によれば、女性教師は信行道場を出ても活躍する場も少なく、住職職に就く者はわずか三二％であるという。

寺院内での性別役割分業体制は根強い。寺族たちは裏方的・補佐的な雑務を負わされるばかりで肝心の仏教の知識を得ることを期待されず、むしろそこに踏み込まないことが美德だとされる風潮があるといひ、仏教を学ぶことのない・できない不満も散見される。また、「跡継ぎたる男子」の出産を周囲から期待されることへの苦しさや悔しさ、母性を過信し寄りかかってくる重圧など、大きなプレッシャーが課せられていることもみ

てとれる。

女性たちのつながりの希薄さも大きな問題であろう。身近に相談相手のいない心細さ、地域や寺関係のしがらみの中では言えない悩み、既存の寺教会や婦人部だけでは対応しきれない心のケアなど、様々な指摘がなされている。また、所属や属性、立場などによる女性間の溝もあるという。

以上が、女性仏教徒たちからみた現代日本仏教の抱える問題の概略である。ここで確認したいことは、教義や制度に内包されている諸問題がどのように女性たちの境遇に影響を与えているかである。例えば、三従説は（主〓男性）／（従〓女性）イメージを生み出し、男性に教化される対象としての女性像を導く。だからこそ、徹底した性別役割分業は正当化され、男性僧侶の補佐的役割のみを担わされるようになるのだろう。女性僧侶をめぐることも、比丘尼が比丘に対して守るべき法を定めた八敬法は、女性僧侶が下位の存在であるかのようなイメージを導き、そのことが種々の不利益を生み出す土壌となっていることは疑いようもない。しかし近年では、五障三従説や八敬法は釈迦によって示されたものではなく、後世に付加されたものとする指摘が教義学の立場からなされている。典拠の疑わしい性差別的な教義や思想を否定することは、女性仏教徒たちを勇気づけるものとなり、両性平等な仏教を自らの仏教観として描く力強い根拠となり得る。そして実際に、女性たちは仏教の理想と現実との落差を問題として指摘し、その是正の方向性を打ち立てる試みを行っているのである（例えば、「女性と仏教 東海・関東ネットワーク」の実践など）。

最後に、仏教とフェミニズムの豊かな結びつきについての一端を示したい。ある女性仏教徒は、仏教がフェミニズムに貢献し得る可能性について語ってくださった。それは、女性としてのどのような苦しみを抱えているか(苦諦)、その原因は何か(集諦)、その問題が解決された状態はどのようなものか(滅諦)、解決の方法は何か(道諦)、という「四諦」に基づく思考法である。いかなれば、女性と仏教をめぐる現代的課題の見取り図を描くことを試みた本発表は、「苦」と「集」の作業である。また、性差別的言説の典拠を否定したうえで示されるジェンダー平等な仏教観やそれが実現した未来は「滅」、そして女性仏教徒たちの実践的な試みは「道」として捉えることも可能だろう。女性仏教徒たちの既存仏教への異議申し立ての試みは、優れて仏教的な営みともいえるのである。

世界遺産のオーセンティシテイ概念と神仏習合

中西 裕 二

現在、日本では多くの寺社がユネスコの世界文化遺産として登録されている。だが、世界文化遺産に登録されている神社、宮を見る限り、それらの多くが中世的な神仏習合、本地垂迹思想、そして寺社勢力と関係するものの、世界文化遺産関連の文章においてこの点への言及が非常に乏しい。

世界文化遺産へ登録される文化財は、そのオーセンティシテイが最も重要とされる。しかし、このオーセンティシテイ概念

は、登録される文化財が歴史的に「本物」であるかどうかの指針に過ぎず、文化のオーセンティシテイ、あるいはその文化主体をユネスコが考慮・判断する訳ではないからである。この登録は、あくまで「もの」中心主義であり、その文化的主体がユネスコのレベルで問われることはない。

世界文化遺産に登録されている神社、宮の、かつての宗教主体は寺社勢力であり、それらの施設は、かつての寺社勢力の換喩的象徴であると言える。だが、宮が神を、寺が仏を祭祀する施設であるという「もの」中心主義の視座でいえば、仏／神・外来(non-nation)／土着(nation)・仏教／神道という隠喩が成立する。中世の神仏習合的世界観は、この図式においては一時期の「混淆」を示す形態であり、かつ双方の主体がnation概念に収斂される、つまりその文化的主体は日本人であるという近代的な概念にすり替わることで、主体としての寺社勢力は不問に付される。だが問題なのは、現在に残された施設(社殿など)は、古代的祭祀の遺構でも、近代的な神道概念をもつ集団が主体となり建造した施設でもないという点である。しかし、近代的な仏／神の二分法(＝創られた伝統)が世界遺産にも適用されることで、近代的な宗教図式が世界遺産の文脈で再生産されているといえる。

これは、具体的な「もの」のレベルでは、実は神仏習合は見えにくいという点とも関係するだろう。例えば、神仏習合の理念を表す具体的な建築様式などはない。従って、「もの」を中心と考えれば、おのずと上記の図式での説明が妥当ということになる。